

書 評

金澤周作編『海のイギリス史——闘争と共生の世界史』（昭和堂、2013）

木畑 洋一



近年、海に視点を置いて各地域の歴史を見直してみようとする動きが広がっている。日本の歴史学界をとってみても、本書の「総説」で触れられているように、『海から見た歴史』と題する巻を第1巻とする羽田正氏などの「東アジア海域に漕ぎだす」シリーズが出版されているし、少し前には桃木至郎編『海域アジア史研究入門』も出されている。海から見る歴史は、世界史の再検討がさまざまな形で進められているなかでの、きわめて有力な一潮流なのである。

本書は、そのような歴史研究の新しい流れに重要な貢献をする作品である。島国であるイギリスにとって海が重要であることは、当然といえば当然であったはずであるが、本格的に海を基軸として、そこからイギリス史に迫っていこうとした研究は、日本ではこれまで決して多くない。自分の無知をさらけ出すだけのことかもしれないが、評者の場合、そのような研究としてすぐに頭に浮かんでくるのは、別枝達夫『海事史の舞台』と横井勝彦『アジアの海の大英帝国』位しかなかった。筆者自身の研究でも、イギリス帝国史を論じるに当たって、イギリスが「七つの海」で大きな力をふるったなどと述べながら、その内実について深く考えることがないままに過ごしてきた、というのが正直なところである。それだけに、『海のイギリス史』というタイトルで直球勝負をしようとする本書の出版は、大変喜ばしい。

本書は、編者による総説と、四つの章から成る第1部（部のタイトルは「光」）、同じく四つの章の第2部（「影」）、イギリス以外の国々を扱った五つの章をもつ第3部（「反射」）という本論で構成されており、さらに20

に及ぶコラムが設けられている。紙幅の関係上、目次をまとめて提示することや、各章の内容を紹介していくことはやめ、評者の印象と感想を述べていきたい。

本書を作り上げている三部の内、評者が最も関心をそそられたのは、第2部である。四つの章から作り上げられているとはいえ、筆者は二人であり、本書の編者である金澤周作氏と薩摩真介氏とがそれぞれ一対になっている二章ずつを執筆している。金澤氏は、海難（第2部第1章、以下2-1という形で表記）と密貿易・難破船略奪（2-2）について、薩摩氏は海賊（2-3）と私掠（2-4）について論じているのである。第1部が、海に関わる歴史のいわば表舞台を扱っている（1-1：探検・科学、1-2：海軍、1-3：海と経済、1-4：港）のに対し、第2部で取り上げられているのは、部のタイトルがうまく示しているように、陰になってみえない舞台裏部分を多く含むテーマである。

航海する船の多くが難破したことを私たちはよく知っているが、では実際海難がどれほどどのようにして起こったのか、また海難救助がいかなる問題を含んだのか、考えてみれば知らないことだらけである。金澤氏は、そうしたさまざまな点について読者の蒙を啓いてくれるし、さらに次の章で、この問題に密接に関連した難破船略奪を論じることで、読者の視野をいっそう広げてくれる。薩摩氏は、海賊と私掠の異同について、それぞれを扱った章で繰り返し強調しながら、それらの態様と意味とを解明している。その間の境界線があいまいであることは当然として、評者にはまだよく分からないところが残ったが（たとえば私掠を定義する際の「戦時に」という条件の具体的内容である）、これまで両者間の違いを十分に意識してこなかった者として、大いに学ばせていただいた。

次に評者が興味をもったのは、第3部である。「海のイギリス史」とタイトルで銘打ちながら、イギリス以外の国を対象とした第3部が最も多くの章を含んでいることに最初は多少奇異の感をもちながら読み進んでいく内に、この部分がかもっている重みに気づかされた。第1部、第2部で扱われている内容の世界史的意味が、まさにこの第3部によってよく示されているのである。これからこの本を読もうとする人は、ポルトガルとスペインを扱った合田昌史氏の章（3-3）やオランダを描いた大西吉之氏の章

(3-4) を、総説の次に読む方がよいかもしれない。また、近世フランスの海軍と社会を論じた阿河雄二郎氏の章(3-2)やイギリスとの関係を軸として中国の海賊、海難、密貿易問題に切り込んだ村上衛氏の章(3-5)は、第1部、第2部によく呼応していて、それらについての理解をよく助けてくれる。

このように、第2部、第3部の意味を強調するからといって、評者が第1部の重要性を軽視するものではないことも、蛇足ではあろうが、付言しておきたい。何とんでも、これから日本で海からイギリス史を見ようとする場合に、まず参照すべきはこの部分ということになる。国際的に最先端の研究を行っている石橋悠人氏の議論(1-1)をはじめ、情報の密度はきわめて濃い。

次に本書全体に関わるコメントに移りたい。各章はそれぞれ対象としているテーマについて、新しい研究動向を踏まえて分析を加えているが、その際に共通して留意している視点がある。

一つは、社会史的視点の重視という点である。とりわけ、それぞれの対象に関わって、そこで生活している人々「海に生きる人々」について、目配りのきいた叙述がなされていることが印象的である。薩摩氏が海軍を論じるに際して(1-2)水夫に大きなスペースを割いていることや、坂本優一郎氏が海と経済についての章(1-3)で海運に携わる人々の実態を丁寧に紹介していることなど、そうした視点は各所で目立っている。

「海に生きる人々」のなかでも、とくに女性について充実した叙述が多い。薩摩氏が海賊を扱うに際して女海賊の問題を紹介している点が、西川杉子氏がコラム20で扱うアーサー・ランサムの小説に出てくる中国人の女海賊に呼応するところなど、計画したわけではなかったと思われる構成の妙もある。また、女性に関する叙述で評者が最も面白く読んだのは、大西氏が描いたオランダ東インド会社船員たちの妻の仕事の一つであるリクルーター(食い詰めた人々や船をおりた船員たちを手練手管を用いて船にのせていく役割を演ずる人々)の姿である。

さらに、このような社会史的視点を重視する姿勢ともからみあいながら、本書の多くの章が打ち出しているのが、これから先、どのような研究課題や研究方向がありうるかという、「海からの歴史への研究の誘い」

と呼ぶことのできる姿勢である。たとえば、金澤氏は海難についての章(2-1)で、日本国内で扱うことができる史料からいかなる研究が可能かについて、見解を披露している。港についての章(1-4)の最後の部分で、林田敏子氏が、ドック・ストライキを労働組合運動史の文脈から解き放つという研究方向を提示していることなども、有益な提言として受け止めた。

本書全体に関わって注文をつけるとするならば、総説で金澤氏が提起している本書の大きなねらいが、どこまで実現されているかという点になるであろう。金澤氏は、「海の歴史は、一方で、イギリス近世・近代史のバランスのとれた、多面的な姿を描き出す上で非常に適し、他方で「イギリス」を主要なアクターないし背景にするグローバルな人間行動を再構成する前提として不可欠な視角なのだ」と述べた上で、現在多くのイギリス史叙述は三つの「二重性」に引き裂かれている、として、海の歴史はその「二重性」を三つながらに統合する可能性を秘めている、と主張している。三つの「二重性」とは、ローカルな歴史とグローバルな歴史という二重性、陸の景観と海の景観という「二重性」、そしてクルーソー的イギリスとガリヴァー的イギリスという「二重性」(前者は、強く揺るがないイギリス帝国の勝利の物語を示し、後者は不安定で脆弱、失敗を重ねる物語を示す)である。この課題への取り組みに、本書はどこまで成功しているであろうか。

まず第一のローカル/グローバル(微視的/巨視的)という二重性の統合は、本書の第1部・第2部と第3部のつながりからも、また各章の主題を常に広い世界のなかで位置づけていこうとする全体の姿勢からも、かなり成功していると感じられた。ただ、この点に関してさまざまな示唆を与えてくれる巻末資料は、今少し積極的な活かし方があったのではないかと思われる。

それに対し、第二の陸と海という二重性、第三の強さと弱さという二重性の統合が、本書全体でどこまで意識的に追求されたかについては、若干の疑問が残った。たとえば、最も分かりやすい例であるが、海軍を論じるに際しては陸軍を意識した議論がある程度必要であったろう。また、強さと弱さという二重性に関して、第1部が概してイギリスの強さをあらかず

側面を扱い、第2部がイギリス史の本流から外れるようなイギリスの弱さを示す側面を扱うと、編者が述べている点は、いかがなものであろうか。いずれの章にも、強さと弱さの両契機は含まれており、その点のより明示的な検討が求められる。

ただ、こうした二重性の指摘、それに関わる「海の歴史」の可能性の主張は、きわめて魅力的である。本書を一つの出発点として、日本でも「海のイギリス史」研究がこれから盛り上がっていくことを期待している。